

第7番目の日 - 概念



カメラ オブスクラ

(英語:camera obscura、ラテン語:camerae obscurae、「暗い部屋」の意味。)

は中が暗い箱で、その片方に小さな針穴（ピンホール）が開けてあります。

外の光景の一部からの光が穴を通り、穴と反対側の内壁に縮小された、逆さまに像を結ぶびます。

穴と反対側の内壁を臭化銀 Silberbromid(AgBr)でコーティングされた感光紙を置くと、外の光景を写真に収めることができます。

長い露光時間(7日から) 臭化銀が染色しはじめ、独りでの光が差し込む間に写真が現像されます。



7日目-パーティシペーション



そでに感光紙が入っている暗箱(針孔写真機)一箱と一緒に封筒と説明書が与えられます。封筒には独自の番号が書かれており、その番号をインターネットに入力すると、自分の写真を見つけることができます。

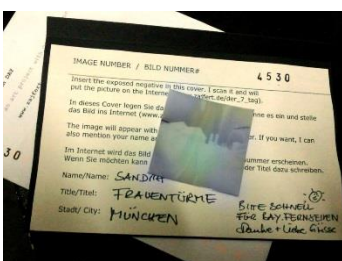
私がスキャンしたネガ像をインターネットで見ることができ、ダウンロードも可能です。

その上、このプロジェクトの参加により他の参加者から送られてきた写真にもアクセスすることができます。

写真を保存したり、プリントアウトすることができます(50x50 cmまで、画質の細かいのプリントが可能です)。

送ってくださったネガ像は、スキャンする最中に滅失されます、のこるのはデジタル情報のみです。スキャンには一度だけ挑戦することができます。そのため、スキャンの画質に限りがあります。なぜなら 高い画質の場合、写真のクオリティの落ち込むからです

缶詰を固定し(写角はくらい120°までです) 露光時間を少なくとも7日あげてください。シールを外すと写真撮影が始まります。露光を終えた後、できあがりのネガ像をなるべく暗い場所で缶詰から取り出し、封筒にいれ下記の住所に送って下さい。



Studio Zajfert
Gutbrodstr. 42
70193 Stuttgart
Germany

7日目-撮影技術

1200年ごろから、Albertus Magnus により酸化と硝酸銀の黒化が知られていました。そして1719年Johann Heinrich Schulzeが行った実験により、光による銀塩の黒化を証明されました

Nicéphore Niépce は硝酸銀の性質を使い、1816年に撮影実験をしました。彼は、硝酸銀でコーティングされた紙をカメラ オブ スクラ（レンズを備えていました）にいれ、窓の前におきました。数日後にネガ像ができ、光を浴びせると黒くなって 滅失しました。Niépce はこの方法に„Retina“という名前をつけました

長露光時間用のカメラは、レンズでわなく、針穴入りのアルミニウムをつかいます。穴と反対側の内壁には、臭化銀のコーティングが施された紙がおいてあります。穴を通る光の量はレンズより大幅に少ないので、Niépceの方法より長い露光時間が必要です。

決定的なのは、1816年にまだネガ像を保存する方法が知られていなかったことです。現在それは、デジタルコピー方法によりできます。

露光後、現像紙をスキャンし、パソコンでネガ像をポジ像に転換することができます。